



哲学・評論

にしだきたろう

西田幾多郎

山口市
(1870～1945)



提供・石川県西田幾多郎記念哲学館

【著作】

『善の研究』（明治44・弘道館）
『西田幾多郎全集（全19巻）』（昭和22・28 岩波書店）
『西田幾多郎全集（全24巻）』（平成14・21 岩波書店）ほか

【閲覧情報】
山口西田読書会（山口）
石川県西田幾多郎記念哲学館
西田・田辺記念講演会（京都）
京都学派アーカイフ（京都）
西田哲学研究会（東京・京都）
西田幾多郎博士記念館（寸心荘）（鎌倉）

西田が山口に来たのは明治三十（一八九七）年九月のことであるが、この年は西田にとって大きな変化があった年でもある。哲学者として名を成さんとすることと家庭生活との間の葛藤で苦しんでいた西田であったが、五月には離婚と免職を経験する。六月から八月にかけて京都妙心寺の大接心に初めて参加。八月末には妻も戻り、山口高等学校（現山口大学）への就職も決まる。

こうして西田は単身山口の地で自己を見つめつつ、本格的に禅の修行を開始する。また西田はマタイ伝第六章の「汝らのうち誰か思い煩いて身の丈一尺を加え得んや」の語に出会い、自分を苦しめていたものは外への関心であったことに気付き、「人が深く深く心の奥を探りて真正の己を得て之と一となるの時あらば、たと其時間一分時なりとも其生命は永久ならん。何ぞ己が精神を苦めて之の醜肉体を保つの要あらんや」と述べるに至る。十一月十一日のことである。（明治三十年・山本良吉宛書簡）

この頃の西田の立場を表明するのが明治三十一（一八九八）年六月に書かれた「山本安之助君の「宗教と理性」と云う論文を読みて所感を述ぶ」である。この中で西田は次のように述べる。

哲学者は宇宙を見ることが最も浅く
又不完全なり、（中略）故に哲学者
にして真に己が目的を達せんと
欲せば、畢竟宗教に入らざれば
能わざるべし。

（旧版『西田幾多郎全集』第十三巻七十六頁）

山口時代の西田は哲学者ではなかったのである。しかしそれは「哲学者にして真に己が目的を達せん」がためであった。山口時代は明治三十二（一八九九）年七月で終わりを告げるが、猛烈な禅の修行（打坐）は明治三十六（一九〇三）年に「無字の公案」を一応透過するまで続く。

その後西田は哲学者としての道を歩み始めるが、悪の問題で躓く。この葛藤の中で宗教的覚悟を含



本と眼鏡
(提供・石川県西田幾多郎記念哲学館)



山口高等学校教務嘱託辞令
(提供・石川県西田幾多郎記念哲学館)

み得る哲学的直観を得る。それが明治三十九（一九〇六）年のことである。その直観をもとに書かれたのが名著『善の研究』である。この書は日本人の手になる初の独自の哲学書として必読の教養書とされた。

西田の立場はその後のこの書の「純粹経験」の立場から、「自覚」、「場所」と深化したが、基本的な立場はこの書で確立した。

西田幾多郎年譜

（提供・佐野之人）

経験するというのは事実其儘に知るの意である。全く自己の細工を棄てて、事実に従うて知るのである。純粹というのは、普通に経験といつて居る者もその実は何らかの思想を交えて居るから、毫も思慮分別を加えない、真に経験其儘の状態をいうのである。例えば、色を見、音を聞く刹那、未だこれが外物の作用であるとか、我がこれを感じて居るとかいうような考のないのみならず、この色、この音は何であるという判断すら加わらない前をいうのである。それで純粹経験は直接経験と同一である。自己の意識状態を直下に経験した時、未だ主もなく客もない、知識とその対象とが全く合一して居る。これが経験の最醇なる者である。

（『善の研究』岩波文庫版 第一編第一章冒頭より）

純粹経験においては未だ知情意の分離なく、唯一の活動である様に、また未だ主観客観の対立もない。主観客観の対立は我々の思惟の要求より出てくるので、直接経験の事実ではない。直接経験の上においてはただ独立自全の一事実あるのみである、見る主観もなければ見らる客観もない。恰も我々が微妙なる音楽に心を奪われ、物我相忘れ、天地ただ嚟唳たる一楽声のみなるが如く、この刹那いわゆる真實在が現前して居る。これを空気の振動であるとか、自分がこれを聴いて居るとかいう考は、我々がこの實在の真景を離れて反省し思惟するに由つて起つてくるので、この時我々は已に真實在を離れて居るのである。

（『善の研究』岩波文庫版 第二編第三章より）

明治3（一八七〇）年	一二歳
明治15（一八八二）年	二二歳
明治16（一八八三）年	二三歳
明治17（一八八四）年	二四歳
明治19（一八八六）年	一六歳
明治20（一八八七）年	一七歳
明治21（一八八八）年	一八歳
明治23（一八九〇）年	二〇歳
明治24（一八九二）年	二二歳
明治27（一八九四）年	二四歳
明治28（一八九五）年	二五歳
明治29（一八九六）年	二六歳
明治30（一八九七）年	二七歳
明治32（一八九九）年	二九歳
明治36（一九〇三）年	三三歳
明治37（一九〇四）年	三四歳
明治39（一九〇六）年	三六歳
明治40（一九〇七）年	三七歳
明治42（一九〇九）年	三九歳
明治43（一九一〇）年	四〇歳
明治44（一九一一）年	四一歳
大正元（一九一二年）	四二歳
大正14（一九二五年）	五五歳
大正15（一九二六年）	五六歳
昭和3（一九二八年）	五八歳
昭和6（一九三二年）	六一歳
昭和8（一九三三年）	六三歳
昭和9（一九三四年）	六四歳
昭和18（一九四三年）	七三歳
昭和20（一九四五年）	七五歳

5月19日、石川県河北郡宇ノ気村（現かほく市）に、父得登、母寅三の長男として生まれる。

3月、新化小学校（現・宇ノ気小学校）を卒業。

7月、石川県師範学校に入学。

10月、チフスのため退学。

9月、石川県専門学校附属初等中学校に補欠入学。

9月、石川県専門学校が第四高等中学校と改称。10月、同校予科第一級に編入学。

7月、第四高等中学校予科を卒業。9月、同校本科一年生となり、哲学者になろうと決意する。四高では同級生に鈴木貞太郎（大拙）、藤岡作太郎（東圓）、金田（山本）良吉等がいた。

3月、第四高等中学校を中途退学。秋、眼を病む。

3月、山口高等学校教務嘱託となる。山口県山口町米屋町に住む。

8月、山口高等学校教授となる。7月、第四高等学校教授に就任。

8月、無字の公案透過。

8月、弟憑次郎旅順で戦死。

夏休み、『善の研究』第二編に相当する部分を執筆。（「純粹経験」の立場確立）

1月、次女幽子死亡。

7月、学習院教授に就任。

8月、京都帝国大学文科大学助教授に就任。

2月、『善の研究』を弘道館より出版。

9月、「論理の理解と数理の理解」（「自覚」の立場へ）

1月、寿美没。

6月、「場所」（「場所」の立場へ）

8月、停年退職。

12月、山田琴と再婚。

7月、鎌倉姥が谷に持ち家を手。10月、完成。以後、毎年、夏と冬を鎌倉で過ごす。

6月、8月、「弁証法的 一般者としての世界」

5月、国策研究会の求めに応じて「世界新秩序の原理」を執筆。

4月、「場所的論理と宗教的世界観」。6月7日、尿毒症のため逝去。